

第8章 図書館および図書・電子媒体等

【目標】

岡山理科大学図書館は、教職員・学生へ研究のための学術情報を提供するセンターとしての役割を果たすとともに、学生の学習への支援を行うことをその目的としている。

学生の学習活動への支援に関しては、単に講義での学習の補充だけでなく、高度技術社会へ適応していく上で必要な学術情報を獲得するための、教育・訓練の場としての図書館を考え、インターネット・電子ジャーナルなど、次々と登場する新メディア・新ツールへの対応（調査・導入・利用指導）を行う。

また、私立大学図書館協会、中国四国地区大学図書館協議会、岡山県大学図書館協議会、日本図書館協会等での活動を通して、図書館間の相互協力を維持発展させて、未所蔵資料に関しても提供可能となるように務める。

さらに、図書館所蔵資料及び施設を地域に開放し、地域への貢献を図る。

以下、図書等の資料整備、図書館施設の整備、閲覧環境、地域への開放状況、学術情報システムや他大学との協力状況について、報告する。

8.1 図書、図書館の整備

8.1.1 図書、学術雑誌、視聴覚資料、その他教育研究上必要な資料の整備

【現状の説明】

予算はその約7割強を資料購入費が占めているが、18才人口の減少などにより、ここ数年、配分額の削減傾向が続いている。

資料は、理工系の図書・雑誌を中心として収集・整備しており、図書館備え付けの和書・和雑誌は学習用資料、洋書・洋雑誌は研究用資料の色合いが濃く、予算削減によりその傾向はより強まっている。

資料の年間受入数は、ここ数年、毎年やや減少傾向が続いている状況で、図書館備付図書に限ってみると、年間6,000～7,000冊の受入となっている。大学全体での平成17年度の雑誌購読誌数は約700誌であり、減少傾向にある。

過去3年間の総経費、受入数や蔵書数は、（表8.1.1～表8.1.4）に示す通りである。

【点検・評価】

蔵書の約7割は理工系図書で、本学の特色を反映している。

しかし、予算削減の影響は大きく、特に資料費の予算額の減少が著しい。

図書においては、学部学生用の単行本の購入を最優先し、学術ビデオ、二次資料、人文・社会系推薦図書及びほとんどの研究用の洋書・データ集などの購読数を削減するなどして対応し、今のところ学生の学習用図書（理工系和書の新刊書）に対する収集・整備への影響を防いでいる。研究用の図書については、ほとんどを教員予算で対応してもらっている。

雑誌においては、外国雑誌の価格高騰が続いており、毎年多くの購読中止雑誌を出すようになってきた。

オンラインジャーナルについては、契約を中止するとバックファイルへのアクセス権がなくなるものが多い。アクセス権のないものについては、价格的メリットも見られないため、冊子購読によりアクセスが可能となるものを中心に利用しており、現在約700タイトルが利用可能となっている。

(表8.1.1) 図書館総経費 (単位:千円)

費 目		2002 年度	2003 年度	2004 年度
図書館図書費 (資料費)	購読雑誌 (内 外国誌)	83,786 (77,728)	80,129 (75,844)	74,370 (71,258)
	図書購入費	24,074	23,657	21,558
	視聴覚資料費	167	340	340
	資料費合計	108,026	104,126	96,268
教育研究経費 (經常費)		41,324	38,482	41,651
教育研究機器備品費		3,141	2,882	1,203
合 計		152,491	145,490	139,122

(表8.1.2) 備品資料年間受入数 (大学全体 単位:冊)

項 目		2002 年度	2003 年度	2004 年度
図 書	和書	9,357	9,439	6,923
	洋書	2,139	2,215	1,724
	小計	11,493	11,654	8,647
製本雑誌	国内誌	1,113	955	594
	国外誌	2,439	2,409	2,263
	小計	3,552	3,364	2,857
合 計	和	10,470	10,394	7,517
	洋	4,578	4,624	3,987
	小計	15,048	15,018	11,504

(表8.1.3) 図書館配架 (図書館図書費・創設事業費) 図書の購入状況

項 目	2002年度		2003年度		2004年度		
	冊	金額 (円)	冊	金額 (円)	冊	金額 (円)	
理工系図書 一括購入	和 書	4,772	17,504,868	4,481	17,197,508	3,206	16,187,056
	洋 書	63	1,337,103	59	1,453,496	48	1,443,970
	小 計	4,835	18,841,971	4,540	18,651,004	3,254	17,631,026
人文・社会 一般選定	和 書	515	1,510,016	541	1,536,036	580	2,376,420
	洋 書	11	141,958	12	99,326	10	78,163
	小 計	526	1,651,974	553	1,635,362	590	2,454,583
講義関連書	和 書	767	3,471,342	720	3,342,149	367	1,371,590
	洋 書	19	108,780	5	28,300	6	100,386
	小 計	786	3,580,122	725	3,370,449	373	1,471,976
創設事業費	和 書	—	—	454	2,019,271	—	—
	洋 書	—	—	145	4,320,729	—	—
	小 計	—	—	599	6,340,000	—	—
視聴覚資料	14	165,664	31	339,906	30	339,821	
合 計	6,161	24,239,731	6,448	30,336,721	4,247	21,897,406	

(表8.1.4) 受入雑誌数 (単位:誌 / 括弧内は購入分の内訳)

項 目	2002 年度	2003 年度	2004 年度
和雑誌	1,037 (334)	913 (252)	786(234)
洋雑誌	890 (805)	789 (704)	723(654)
合 計	1,927 (1,139)	1,702 (956)	1,509(888)

「日本の図書館2004」に発表されている2003年度の図書及び雑誌購入費を東京以西の理工系学部・学科を持つ私立大学80大学（全84大学中、資料費については総額のみで図書の内訳の記載のない大学が4大学、雑誌の内訳の記載のない大学が7大学あったので、前者を除く80大学と比較する）のうち、学生1人当たりの図書購入費では65位で下位に、同じく雑誌購入費では24位でやや上位に、蔵書数では49位で中位に位置している。

理工系和書の新刊書は、開講されている関連分野において出版数の約7割を収集できており、新鮮な資料を学生に提供できている点は、大きな長所といえる。ただし、近年学術系図書は1件当たりの出版部数が減り、発行後すぐ絶版となることも珍しくなく、加えて予算が減少傾向にあることから、今後どのように新鮮な資料提供を行っていくかが問題となる。また、生物化学科、臨床生命科学科及び応用物理学科に医療系の専攻が開設されたことから、これまで収集の対象となっていなかった同分野の資料の収集整備も課題である。

雑誌においては、前述の通り80大学との比較で学生1人当たりの購読予算は24位と上位にあり、冊子購読によって利用可能なオンラインジャーナルは全て利用できるよう手続きを行っている。

ただし、外国雑誌の値上げ（特に理工系は値上げ率が大き）に加え、為替レートの変動の影響や、予算削減傾向にあることから、この状況にいかに対応していくかが大きな問題点となる。

【改善・改革の方策】

図書においては、出版後なるべく早く入手できるよう、オンラインでの選書・発注を行っており、今後とも同様な努力を続けていきたい。また、医療系分野の図書については、本学での研究分野に絞って充実を図っていきたい。しかしながら、学生1人当たりの図書購入費は、他の理工系大学に比べて低い状況であり、収集対象分野も増えていることから、できれば予算増を要望したいところである。しかし、予算削減傾向という状況も考慮すると、これ以上の図書予算削減とならないよう、学内での理解を求めていきたい。

雑誌においては、これまで学内教員に購読誌の見直しを毎年依頼している。特に、購読誌の推薦方式を、学科ごとに行っていた従来方式から、各教員が研究分野別に分かれ、その研究分野ごとに推薦をってもらう方式に変更し、各研究分野で核となる雑誌の購読継続を図る方向に進めてきた。点検評価でも触れているがオンラインジャーナルによる予算圧縮効果は余り期待できないのが現状であるが、国内学会誌等は無料公開されている“J-Stage”及び“NACSIS-ELS”を利用している。

また、雑誌情報を補完する目的で、これまで目次あるいは抄録データベース利用の充実努力してきたが（Current Contents Connect, FirstSearch, INSPEC, Knowledge Worker, MathSciNet, Medline, Proquest, ScienceDirect, SciFinder Scholar, 雑誌記事索引 など）、今後もさらなる充実を図りたい。また、オンラインジャーナルのコンソーシアム契約が実現し始めているが、現時点では予算圧縮に寄与する形となっていないため、今後の動向に注目していきたい。

8.1.2 図書館施設の規模、機器・備品の整備

【現状の説明】

本学図書館は第11号館・10号館・21号館の3館に分かれている。閲覧席数、AV機器台数や蔵書検索端末台数などは、(表 8.1.5～表 8.1.7)の通りである。台数を増やしたいところであるが、スペース的にこれ以上の増設が難しい状態である。

移動式書架を年々増設しているが、増設にも限界があり、狭隘化は深刻化しており、古くて利用の少なくなった資料の廃棄を行わざるを得ない状況となった。

1998年度末に業務システムをホストコンピュータ型からクライアントサーバー型のシ

システムに移行し、2004年度に業務用・利用者用端末を新型のパソコンに更新したところである。また、2004年度には不正持ち出し防止システムを従来使用していた電波式から磁気式のシステムに変更するとともに、利用者用コピー機をカラーコピー機へ変更した。

(表 8.1.5) 施設面積・閲覧席数・資料収容力

項目	単位	11号館	10号館	21号館	合計
閲覧スペース	m ²	434.77	178.24	599.05	1,212.06
書架スペース	m ²	638.00	425.33	286.38	1,349.71
その他スペース	m ²	393.76	41.53	159.63	594.92
合計	m ²	1,466.53	645.1	1,045.06	3,156.69
閲覧席	席	283	70	248	601
資料収容力	冊	187,222	126,944	75,278	389,444

(表 8.1.6) コンピュータ関連機器・AV機器等の台数

利用者用	台	利用者用	台	業務用	台	業務用	台
利用者用公開端末	14	DVD デッキ	2	業務用サーバー	4	業務用プリンタ	8
CD-ROM 検索用 PC	6	CD デッキ	1	DNS,Web サーバー	1	スキャナー	3
CD-ROM/DVD //	2	テープデッキ	1	貸出返却用 WS	4	放送用 CD デッキ	2
特定 DB 検索用 PC	1	テープ/CD デッキ	2	貸出返却用端末	5	業務用コピー機	1
利用者用プリンタ	5	利用者用コピー機	4	業務用端末	16		
ビデオデッキ	6	裁断機	1	蔵書点検用 Note PC	3		
ビデオ/DVD デッキ	7	簡易製本機	1	商用 DB 検索用 PC	1		

(表 8.1.7) 学生 1 人当たりの指数

学生収容定員 (人)	総面積 (m ² /人)	蔵書数 (冊/人)	閲覧席数 (%)	検索端末数 (台/千人)
5,323	0.6	70.0	11.3	2.6

【点検・評価】

学生 1 人当たりの面積は、中国四国地区の私立大学や、全国の理工系学部学科を持つ私立大学と比較しても非常に低位に位置しており、また 3 館に分散しているために利用する上で不便であり、運用管理にも手間がかかる状況である。また、蔵書数が書架の収容能力の限界に近づいて来ている。3 館に分散していることや面積の不足により、閲覧スペースや配架スペースの増強が行えない、利用上不便で運営効率が悪いという問題が発生しているのは事実である。

また、閲覧座席数は学生収容定員の 11.3% であり、従来目安とされていた 10% は確保できているが、在籍学生数を基にすると 9.4% (2004 年度) であり、その全国平均である約 11.3% (2003 年度) に比較して少ない状況である。

一方、LAN 環境は全学的に整備され、図書館でも Web サーバーを運営するなど、独自のサービスが展開できている。さらに、DVD など新たな視聴覚メディアへの対応も行っており、ここ数年でビデオデッキの半数以上を DVD も利用できるものに切り替えた。また、先に述べたとおり利用者用の蔵書検索端末を 2004 年度に新型に更新したところであり、コピー機なども含め利用者用機器の更新をある程度行うことができている。このように、LAN 環境が整備されていること及び視聴覚機器や利用者端末のなどの機器の更新が順次

できていることは、長所といえる。

また、閲覧机や椅子など古くなったものを毎年一定量新しいものに入れ替えている。

【改善・改革の方策】

3館に分散していることや配架スペースの狭隘化の深刻化については、3館を1館に統合した新館建設以外に抜本的な解決策はなく、図書館長から大学に検討を要望しているところであるが、具体的なめどは立っていない。

このため、既存施設・備品での運用を考えると、書架スペース対応としては、資料の配置の調整の他に、2005年度から古い理工系図書で利用の少ないものの廃棄を実施することとなった。

また、今後も利用者用端末・AV機器・閲覧机椅子等、入れ替えの可能なものは順次新しいものと置き換えていく予定である。

8.1.3 学生閲覧室の座席数、開館時間、図書館ネットワークの整備等、 図書館利用者に対する利用上の配慮

【現状の説明】

本学図書館の閲覧座席数は、第11号館・10号館・21号館の3館合計で601席であり、学生定員に対する座席数の割合は11.3%である。

開館時間は（表8.1.8）の通りである。2004年度の開館日数は288日である。1999年5月より日曜開館を実施し、2001年度より平日の開館時間を19:45から20:45に延長し、2003年度より土・日曜日を10:00開館から9:30開館にするなど、利用者の要望に応じてきている。また、土曜日が代講日となった場合は、3館とも通常の日開館を行っている。さらに、定期試験の10日前からは、第10号館・21号館も土曜日開館を行っている。

図書館ネットワークの整備等に関しては、1996年より図書館独自のホームページを運営し、9構成（利用案内、蔵書検索、オンラインジャーナル、検索ツール、電子図書館、資料案内、オンライン申込、リンク集、学外の皆さんへ）で、図書館からのお知らせ、図書館カレンダー、新着図書案内、内外の図書館や学術機関のリンク集、各種蔵書検索、外部データベース検索、オンラインジャーナルへのリンクなどを掲載し、コンテンツの充実・拡充に努めてきている。

学外文献複写等は、学内研究室よりホームページのオンライン申込でも受付を行い、海外のドキュメントデリバリーも導入して取り寄せ時間の短縮を図っている。また、2004年度にはILL文献複写等料金相殺サービスにも参加した。2004年度においては、文献複写は、依頼：2533件、受付：1962件、相互貸借は、依頼：72件、受付：約53件であった。

また、携帯電話版ホームページを掲載し、2004年度より就職関連図書案内や県内高校生対象の見学・業務体験ツアー等も掲載している。他に、2003年10月より文部科学省の教育情報衛星通信ネットワークのエル・ネット放送受信局として各種放送を利用提供している。国立国会図書館のレファレンス共同データベース実験事業にも参加している。

図書館利用者に対する利用上の配慮の状況については、（表8.3.2）の通り、図書貸出冊数を無制限としている。利用者への広報は、広報誌「りとにゅーす」を年2回発行し、緊急に知らせたいことは「りとにゅーすStardust」を随時発行している。また、利用案内のほか、蔵書検索端末の使い方や図書館の利用方法の解説マニュアルなども作成するとともに、図書館で配布する資料は殆どホームページに掲載し、PDFファイルで利用可能である。4月には新入生対象のオリエンテーション（図書館探検）や図書館見学を実施している。さらに、図書館ホームページのコンテンツの充実・拡充にも努めてきており、週2回、希望者に対し、インターネットでの学術情報へのアクセスの仕方についての講習会も実施している。また、

OLION（岡山理科大学図書館情報システム）には、蔵書検索だけでなく、「図書館へのメッセージ」機能も追加し、利用者から図書館への意見・要望を送信できるようにし、それに対する図書館からの回答も画面上で公開している。レポート関連参考図書については、事前に教員に連絡してもらい、利用者の要望に対応できるよう努めている。就職支援に関しても、就職関連図書リストを作成・配布し、ホームページにもそのリストを掲載している。学外利用者には、ホームページに利用案内や「図書館利用願」(PDF)を掲載している。

(表8.1.8) 利用条件 ①通常期開館時間

	11号館	10号館	21号館
月~金	9:00~20:45	9:30~16:45	9:30~20:45
土	9:30~16:45	閉館	閉館
日	9:30~16:45 (4月閉館)	閉館	閉館

(表8.1.9) 利用条件 ②貸出冊数・期間

		学部生	院 生	教職員	一 般
図書	通常期	無制限・14日	無制限・28日	無制限・28日	30冊・14日
	制限期	30冊・14日	30冊・28日	無制限・28日	10冊・14日
雑誌		30冊・3日	30冊・3日	30冊・3日	貸出しない

※ 制限期間は定期試験の始まる30日前からとする。

【点検・評価】

閲覧座席数は、学生収容定員に対して11.3%で、8.1.2でも述べた通り、他大学に比較して少ない状況である。定期試験期は利用者が急激に増加するため、座席が不足することが多い。また、図書館資料が、第11号館・10号館・21号館の3ヶ所に分散していることも、利用に支障をきたしている。また、配架スペースの狭隘化が深刻化してきていることから、資料の配架換えを頻繁に行わざるを得ない状況となっている。配架を変更した場合は、新たな配架場所の広報に努めているが、学生には浸透しきれていないのが現状と思われる。

開館時間は、利用者からさらなる延長希望が出されているが、時間外開館に伴うコスト（人件費、光熱費）と実際の利用者数を考慮すると、現状のままで問題はないのではないかとと思われる。入館者数が減少しているが、学園前までバス路線が延長（1999年10月）されたことやスカイテラスの開設（2000年1月）、25号館の開設（2004年9月）などに代表されるように、学内環境が改善されたことにより、学習や読書目的ではなく、単なる時間つぶしで来館していた学生の数が減ったのではないかと考えられる。ただし、17時以降の延長時間帯の入館者数は増加しており、土・日曜日開館については、利用者から図書館が常に開館しているという認識をもたれている。県内の他大学でも平日の開館時間は延長傾向にあるが、日曜日開館を行っている大学は岡山大学と本学のみである。日曜日開館は、在学生の利用のみでなく、学外者が来館しやすい状況を提供しているといえる。学外利用者の貸出が増加しているのは、本学の理工系図書の新刊書の充実が考えられる。代講日の土曜開館は、平日開館で運用しているが、平日とほとんど変わらない利用がある。

10号館図書館での来館者の減少は、配架スペースの関係と学習環境の改善のため、人文・社会科学系図書を段階的に10号館図書館から21号館図書館に配架替えしたことなどの影響と考えられる。また、インターネットの普及により、書誌情報の調査や軽微な調べ物などは、図書館に来なくても調べることが可能になったこともその一因と考えられる。貸出冊数は無制限ではあるが、返却を考慮して極端な借り方はされていない。

文献複写については、ホームページからの申し込みやe-mailでの申し込みを受け付けており、NACSIS-ILL, JOIS, STN, BL Inside Web, ScienceDirect など、さまざまな入手ルートを用意し、即時入手を必要とする利用者のニーズにも答えられるようになっている。また、卒業生からの文献複写依頼にも対応している。2004年度よりILL文献複写等料金相殺サービスに参加してからは、他大学からの依頼も急激に増加している。他大学も含め、大学図書館の資料費の削減の影響により、今後もこのサービス利用が増加するものと予想される。

「図書館へのメッセージ」は利用者が気軽に図書館へ意見・要望を送信でき、図書館からの回答も画面上で見ることができ、色々の意見・要望が送信されてきている。図書館からの回答も公開されるため、可能な限り意見・要望に応じていく必要がある。

図書館の利用に対しては、館内オリエンテーションや利用講習会などを開催している。ただし、参加者が少ないので、「図書館利用案内」「OLION Manual」「図書館の歩き方―文献調査・図書館ホームページガイドブック」など、図書館を利用する上での利用マニュアルを充実させてきており、利用者向けマニュアル類は豊富であるといえる。

マナーの悪い学生（飲食、会話、携帯電話の使用、利用資料を元の書架に戻さない など）も多く、閲覧室がうるさいという問題もあり、学生に対するマナーやエチケットの教育をいかに行うかも問題になってきている。

【改善・改革の方策】

閲覧座席数の増加や3館に分散する資料の配架位置の適切性については、施設の問題と関連するため困難な面があるが、配架スペースの容量と利用の上での利便性を勘案し、今後も検討して行きたい。現在、わかりづらいOLION上の所在表示を、新機能での表示に切り替える準備をしている。貸出数の増加については、より魅力的な蔵書構成となるよう資料の収集整備の面でも努力していきたい。

利用講習会の受講者数が少ないことについては、マニュアル類を充実させることにより、貸出カウンターで質問に来た学生に効率よく説明できるように対応している。また、ホームページには、使用条件や使用の仕方を説明したページを設けるなどして、講習会を受講していない利用者に対する案内を充実させてきている。

学生のマナーについては、閲覧室の見回り回数を増やし、個別に指導するなどの対応を検討している。同時に、利用資料を元の書架に戻す指導及び対策を検討していきたい。

「図書館へのメッセージ」をより活用し、送信された利用者からの意見や要望に早急に対応するとともに、それらを積極的に図書館運営に反映させていきたい。

8.1.4 図書館の地域への開放の状況

【現状の説明】

図書館の地域開放については、1988年度より外来者にも学部生に準ずる形での貸出を開始しており、身分を証明するものの提示があれば、簡単な手続きで本学図書館を利用でき、貸出も行っている。また、岡山県大学図書館協議会相互協力協定加盟大学の教職員・学生には身分証明書・学生証を持参すれば本学図書館の利用ができ、貸出も可能としている。これらの活動が認められ、2001年度に岡山県図書館協会より特別功労者として表彰された。

(表8.1.10) に、過去5年間の学外登録者数と図書の貸出冊数を示すが、最近の登録者数は200名近くであり、貸出図書も2000冊を越えている。

また、地域開放の一環として、学外者の利用に際しては、本学図書館への来館前に、自宅からインターネットを通じて、本学図書館に目的の図書があるかないかを検索できるようにし、地域開放の面でも図書館ホームページの充実に取り組んでいる。

加えて、2004年度には、「岡山県高等学校教育研究会学校図書館部会備前支部協議会」

の会合に出席し、本学図書館の紹介、高校生への利用開放の説明を行い、併せて、高校生の本学での「大学図書館業務体験」企画の紹介・提案を行った。2004年度の新企画ではあるが、高校図書館からみると魅力ある企画であり、高等学校側より多数の問い合わせや企画参加が行われた。

(表 8.1.10) 図書館の学外登録者数と貸出図書数

	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度
登録者数(人)	131	141	180	193	206
貸出冊数(冊)	1319	1384	1751	4359	2483

【点検・評価】

学外への地域開放は、1988年からいち早く取り組み、15年以上の実績を有している。ただし、登録者の内容は毎年入れ替わっているものの、高台に位置するという地理的条件のためか、ここ数年、利用・登録者数に大きな変動は見られていない。地理的条件をいかに克服し、利用者へのアピールを今後どのように行っていくかが本学図書館の課題となっている。なお、登録者の内訳としては、岡山県大学図書館協議会相互協力協定加盟校の学生が多いが、技術系会社員も多く、また県内中学・高校教員の登録も増加している。

また、2004年度には岡山市近辺の高等学校に働きかけ、高校生による本学図書館のコンピュータを利用した図書の管理システム、受け入れシステム等の「業務体験」企画を実施し、地域開放の充実を図っている。

【改善・改革の方策】

学外者への地域開放の面では、ここ数年、利用・登録者数に大きな変動はみられないが、岡山県随一の理工系図書資料の所蔵等の特色を活かし、あらゆる機会を利用して地域住民にアピールしていくこととしている。また、2004年度から実施している県内高等学校生徒の本学図書館での「業務体験」企画については、今後は県内全高等学校へ案内し、地域開放の一環としてより充実させていきたいと考えている。

今後の課題として、岡山県随一の理工系図書資料の所蔵という特色をいかしながら、岡山県立図書館等との「図書資料の横断検索・貸借相互協力」等の実施に取り組み、よりいっそうの地域開放に取り組んでいくこととしている。

8.2 学術情報へのアクセス状況

【現状の説明】

図書館の蔵書データについては、図書館蔵書検索データベースシステムに登録し、学内のみならず学外からも Web で検索可能となっている。また、1999年度に導入した図書館システムの電子図書館機能を利用し、「岡山理科大学紀要」について、No.33以降発行されるたびに、掲載論文を画像化し、Web で公開してきている。

利用可能なオンラインジャーナルについては、蔵書検索データベースやホームページからアクセスできるようにリンクし、利用者の便宜を図っている。

国立情報学研究所の NACSIS-CAT/ILL や CiNii などに参加し、国内各大学との相互利用の促進を図ってきているほか、BLDSC の Inside Web など、ドキュメントデリバリーシステムによる文献複写入手のツールも整備している。

岡山県大学図書館協議会や中国四国地区大学図書館協議会などでの協定により、学生や教員が他大学図書館を利用する場合には、お互いに便宜を図り、利用しやすい環境の整備

に努力してきている。

【点検・評価】

紀要については、国立情報学研究所が学術情報センター時代に始めた目次速報データベースの頃よりデータを登録しており、同研究所の研究紀要ポータル事業（現在 CiNii に統合）により、No.1～32 についても電子化が完了し、お互いにリンクすることにより、現在では、図書館の蔵書検索からも CiNii からも、全論文が Web 上で閲覧可能となっている。ただし、現在一般的となってきた PDF には対応できておらず、PDF 化への対応とそのような技術的な知識をもった職員の養成が進んでいないことが問題点としてあげられる。

Web サーバーを図書館独自で運営していることから、図書館システム以外にオンラインジャーナルリストやデータベースリストなどホームページを利用したさまざまな情報提供が行えている。

岡山県大学図書館協議会相互協力協定により、学生証や職員証を提示するだけで岡山県内の各大学図書館での閲覧やコピー機の利用が可能となっている点も利便性の高い環境を提供できているといえる。

【改善・改革の方策】

電子図書館機能のバージョンアップにより、PDF 対応が機能としても可能となったが、既存データの処理も含め今後 PDF 対応を検討して行く予定である。また、その過程で職員の養成も行っていきたい。

国立情報学研究所の各事業は、国内大学図書館のみならず、海外大学図書館も含めた相互協力・情報提供の重要なツールとなっており、今後も積極的に参加して行く予定である。

私立大学図書館協会、国公立大学図書館で構成される大学図書館協議会、岡山県大学図書館協議会など各種の活動を通して、他大学図書館を利用する上での環境整備に努めていきたい。